巻景次郎研究

人と学問

桜楓社

風巻景次郎・人と学問

昭和四十七年三月一日　印刷
昭和四十七年三月十日　発行

定価二、八〇〇円

編集者　北海道大学国文学会
発行者　及川篤二
印刷所　三協美術印刷

101 東京都千代田区猿楽町二ノ二ノ六
桜楓社
電話（03）二九一―五六六一（代）
振替東京一八〇二〇

3091―720117―0723

風巻景次郎・人と学問　目次

風巻景次郎・人と学問　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部　風巻景次郎研究

九　浪華なる風巻景次郎に与ふ　塩田良平
一三　日本文芸学の方法論（抄）　吉田精一
一五　実証主義的方法に対する批判　同
二　文学史の方法（第一稿）　西郷信綱
三三　風巻文芸学の本質　野田寿雄
三八　風巻景次郎　高橋和夫
四八　昭和における文学史の研究　鷹津義彦
五五　日本文学研究の近代化――風巻景次郎の方法論理――　近藤潤一
七六　折口・保田・堀・風巻――国文学その内部外界6――　塚田康彦
＊
八三　〝北緯四十度圏文化〟のこと　小笠原克

第二部　書評・時評抄

新古今時代
九五…岡見正雄　九六…西下経一

九…石　山　徹　郎

文学の発生

一〇二…石　山　徹　郎　　一〇五…岩　崎　万喜夫

神々と人間

一〇九…稲　田　　済

日本文学史の周辺

一一一…秋　山　　虔　　一一五…吉　田　精　一　　一一六…国崎　望久太郎

日本文学史の研究

一一四…久　松　潜　一　　一一六…秋　山　　虔　　一一〇…加　藤　将　之

一一六…鷹　津　義　彦

*

一一九　近代への架橋—昭和二十二年の日本文学界の回顧と展望—（抄）　長谷川泉

一一五　一九五〇年度に於ける古代国家社会の文学の研究（抄）　益田勝実・難波喜造

一一三　一九五一年上半期の日本文学の研究状況（抄）　益田勝実・秋山　虔

第三部　回想・追悼

一六五　一つの決定的瞬間について—風巻先生のこと—（西郷信綱）一六六　風巻景次郎先生（丸山静）　一六八　あゝ風巻景次郎（塩田良平）　一六九風巻景次郎先生を偲ぶ（新間進一）

一七〇…風巻景次郎先生を偲びて（井狩正司）　一七二…風巻教授をいたむ（池田弥三郎）　一七三…風巻君と絵画（江口彰次）　一七五…風巻君を憶う（高木市之助）　一七七…追憶（野田寿雄）　一七九…風巻景次郎君を憶ふ（久松潜一）　一八〇…風巻先生回想（和田謹吾）　一八三風巻を思う（渡辺格司）　一八四…晩年の風巻教授（飯田正一）　一八六…枕詞のマジック（風巻　融）
一八八…あたたかいいたわり—風巻景次郎先生のこと—（秋山　虔）　一九〇　風巻景次郎先生（岩城之徳）　一九一…風巻さんと北海道（中村真一郎）
一九四…こすもす（更科源蔵）

*

一九六　札幌の十年　風巻春子
二二九　思いつくままに　今井源衛

第一部　風巻景次郎研究

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

浪華なる風巻景次郎に与ふ

塩田良平

久しく容觀の機を得ず御起居如何。

東都における吾等先づ変りなし。倉野憲司国粋論を奉じて女子大に熱弁を振ひ、松浦貞俊鳥山に蟄して未だ冬眠より覚めず、プチブル篠田太郎は雪駄をちやらつかせて、唯物史観を振り廻し、阪口玄章〳〵ます和尚化し、藤田の徳太郎やたらに書いて印税をかせぎ、藤川忠治ペンと盃とを手と口に断たず、中島唯一新妻をいとしみ、気がね病患者池田亀鑑此頃やつと泰然自若となる。ひとり森本治吉に至つては秋の蚊の如き身体から人並以上の大声を出して、文学を論じて僕を煙にまくこと十年一日の如し。学界ますます太平ならんとする兆なり。

さて饒舌は止めて本論に入らう。

風巻景次郎君——

君の「日本文芸学の発生」を雑誌「国文学誌に」発見してより既に半歳は経過した。君は該論に於いて文学研究に於ける鑑賞の領域と学問の領域とを明白に規定した。それは僕のいふ文学的研究と歴史的研究とに呼応するものである。もとより君の論文は文芸学建立の実際問題に関する指導理論に非ずして文芸学なる新科学発生の必然性を解明したものに過ぎないであらう。しかし、僕の双手を挙げて賛する処は君がこの新しき文学研究法に於いて、いしくも新カント派を駆逐さつたことである。もとより君によつてリッケルトの歴史哲学が粉粋されたともいひ得なからう。が、君は明かに学の範囲を規定して所謂文化価値を低位において新しき立場を獲得した。一体、明治卅年代の後半より我国の浪漫主義史は、其文学論が著しく独逸観念哲学の影響をうけた事を語つてゐる。此傾向が更に自然主義末期に至つて、新理想主義の抬頭と共に完成され、当時の国文学研究にも適用されて最も進歩的役割を果した事は事実である。この為に国文学の眠れる魂は訓詁註釈解題主義の荒墟から健かに羽撃いて鑑賞の蒼空に跳躍したといふことは出来る。そして、僕等と雖も勿論その恩恵の下に成長したことはいふ迄もないのであるが、しかし、又一方の弊として単なる鑑賞作用に過ぎざるものが如何に哲学なる衣裳にかくれて妖霊的魅力を恣にしたことであらう。生命、人間性なる語彙が、終に内包上に何等の新要素を加へることなくして、常識的に使用され、如何に空漠なる観念と固定して来たことであらう。今こそ、学問なる内容は、少くとも国文学者には、新しく規定されねばならぬ。樹立されねばならぬ。

風巻景次郎君——東都に先づ出づべかりし此叫びは浪華なる君によつて先駆された。僕は欣然としてこれを迎へたものである。学界における西風は来つた。そして、フイレンツェの新市民は胸を躍らせて西風に漂ひ来つたこのヴェヌスを待つたのである。

然るに、きくならく、貴稿は編輯者の切望により創刊号の為にとて脱稿され、その後約半歳、其間、僕如き拙劣なる者の愚論を以てすら、投じて二ケ月を出でずして掲載せられたるに拘らず、君の論文は依然として遷延するといふ誕生難にあることが吾等の耳は伝はつた。しかもわづかに出たのを見れば、二段組仲間として、巻末に近く、外国人の文芸科学論と共に単なる文学論見本としての位置をのみ与へられてゐるのを発見した。これこそ、客を招じて庖厨に導くに非ずして何ぞや。である。果して、君の所論は終に単なる文学論見本に過ぎないのであるか？

翻つて、雑誌「国文学誌」を検せよ。多少、資料癖、吾等のいふ煩瑣学風に対して感情的なる反動色彩を有するとはいへ、文学科学、芸術科学なる新科学樹立の声を盛んにし、昨年度に於ける新興学派の一雑誌であつた事は否めない事実である。その主幹垣内松三先生は、ディルタイ、シェラーをよく読み、よく談じ、解釈学史を貫く「理会の遠白き一路」の研究を以て青年に哲学的訓示を垂れる先験学派である共に、新進学徒に対して指導と誘掖とを惜しまれぬ雅量ある教授であるといふ。其故を以て、先生に未だ拝趨の礼をとらずと雖も、僕等安んじて先生の雑誌に投ずるを得たのである。然るに、貴稿だけは何故にかく難産したのであるか？

もとより、文学研究に於ける自然科学的のみなる方法は、「国文学誌」のとらざる所であつたかも知れぬ。その点、多少之に類する君の所論は、如何なる薄遇の下に掲載されたるにせよ、既に掲載されたこと自身が、該誌の雅量を示したことかも知れぬ。とすれば、今何をかいはむやである。

風巻景次郎君――僕は友人なる君を引合に出すことによつて、この私信が、一般より感情的に誤解されざる事を祈る。しかし、敢ていふならば、いづれにせよ、雑誌社自らが性急に依頼ししかも何等の理由もなくして徒らにその発表を遷延せしめたることは編輯上の手落より生じたことであるか。そが多少長論文なるが故か。或は世に所謂垣内イズムなる語あり。君の所論の性質がその所謂垣内イズムと反するものなる如くとられた故より来つたのであるか。

新興の意気を以てし、新進学徒に最も理解ありと伝へらるゝ、この「国文学誌」にしてすら、既にかくの如き事実ありとせば、他にも推して知るべき例は多々あらう。君の如き場合は未だ〳〵だ恵まれたるものであるかも知れぬ。

僕が敬愛措かざる先輩なる、某古典学者は、記紀に関する研究論文の掲載をば、内容が「神器にふれてゐる故、時節柄」なる理由を以て出版者から苦衷を訴へられ、懇談されて撤回を余儀なくされた事がある。

況や青年にして、自己の信ずる学的所論を世に問はんとして其発表を阻まれたるもの何千何万を算するであらう。

今や学徒の研究は極端に警戒の眼を以て対せられんとしてゐる。学者亦戦々恟々として誤解されざらんことをこれ翼ふ有様である。まさに学風萎微の兆ではなからうか。これ果して学界の為に慶賀すべき兆なりや否や。しかも此兆独り学界のみに止

まるのであらうか？

風巻景次郎君——

君も僕も職を専門の学園に奉ずる教育者である。学者として要求され、且教育者として完備ならんことを求めらるゝものである。

嘗て某高等学校校長に面晤した時、氏は該校在職教授たる僕の友人にして真摯なる学徒Sを讃して告げるに、「S氏はすぐれた教授である。生徒の保証人の気受けが大変よろしい」との言を以てした事がある。氏はもとより何気なく云つたのであらう。が僕はきいて呆然としたのである。校長とは、教授の優れたる研究を認める者に非ずして、保証人の機嫌取を教育の規準におかせる者には非るかと。僕は幸にして僕の奉ぜる学校に此例あるを聞かぬが、世に所謂校長型なるものゝ、学問研究に如何に無理解であるか、其最なるものに至っては、小心翼々として世評をこれ恐れる態度を見ること尠しとせぬ。学問の府にして、しかも、学の自由を認めず。この自家撞着が今白昼堂々として行はる。これこそ聖代の恨事ではないか。

かるが故に、もとより右から生ずる破綻は当然将来される運命ではあらう。しかも現代に於いては此破綻は不自然にも青年学徒に対する一方的圧迫のみによつて弥縫されようとしてゐる状況である。君と雖も、昨今如何に多くの学徒が「赤」なる名の下に学園を追放されるかは知るのであらう。しかも其中にはそのために将来たつ能はざる打撃を蒙つた無辜の犠牲者も決して尠なからざることも知るであらう。だが、過去に於ては、それにしても、いまだ教授者の威厳は損はれなかつた。少くとも手続きに於いて教授をして弁明する処あらしめ、真相を究明する当局側の誠意があつたのである。

然るに、単なるゴシップを過信し、何等真相を追求する誠意なく、もとより本人に何等の予告を与へず、新進学徒を急遽処分して責任を逃れたる軽卒なる校長出でたりとせば、君と雖もその心事の甚だ理解し難きに苦しむと共に、如何に教授なる者の地位が今や不安定なるかをも悟るであらう。以上の如き事大主義者の犠牲となった者に僕の知る青年学徒Kがいる。これ教員受難時代に於ける専門教授の無力なる威厳を物語るものに非ずして何であらう。

だが——これ等は豈所謂校長のみならんやである。君の愛する学生は、教壇にたつ多くの教授に恐らく失望を感じてはゐないだらうか。今や教壇の壇上、壇下を蔽ふものは退嬰、倦怠の気ではないか。悲しみの至つて悲しきは、学生の心がわが講義の百里彼方に違ざかつてゐる事を知る教師の心である。にも拘らず教授は依然として学生と背中合せをし、死灰の如き冷静さを以て、自分勝手に唇を開閉しなければならないのであるか？

風巻景次郎君——

僕は多少の悲観論に傾いたやうである。しかし、事実、右するも左するも不可能なる教育界の現状を如何にせむ。換言すれば、指導原理を見失つてゐる教授者を如何にせむである。

学分裂を極めて諸学風対立し、教授者其奉ずる末梢学を講じて徒らに学生を多岐迷路に陥らしめつゝあるが現状ではない

か。之を遠き過去の宣長、篤胤の国学者に見よ。彼等が、かの時代に於いてすら数百数千の門下を率ゐて一世を指導し得たのは何故であるか。

風巻景次郎君――

僕はここに諸学風を批判し、更に学と人生とを論ずべきに至つたのである。然るに目下匆忙苦悩の際、編者広田君の督促荐りにして、しかも情徒らに激し、却つて君に患ひをかけむことを恐る。又、他日を期して今は筆を擱かう。終りに浪華に於ける君の奮闘を遥か東都の僻郊より祈ると共に、幸にして僕のきまぐれを恐るなからむ事を望む。（七、六、一〇）

（『国文学者一夕話』昭和七年七月　六文館）

日本文芸学の方法論（抄）

吉田精一

序

岡崎義恵教授による日本文芸学の提唱は、最近私達若き学徒を最も動かした問題であつた。その説の中心となる文芸の文芸性の探求、文芸の美的意義の把握といふやうな提示に、鬱陶しい梅雨空にぽつかりと青空を望み見たのを感じ、踊躍を覚えた者は尠くなかつたであらう。今日では日本文芸学についての説明もやうやく進み、その限界も自から定まつたやうに思はれる。私は今此処で、自分の関心してゐる文芸理論の立場に於いて、日本文芸学を自分の問題として、その理論・本質・方法を反省して見ようと思ふ。学に先行する方法論として、国文学方法論のうちに於けるその定位を見出さうと思ふのである。或はこれは私の如き菲才の若輩のなすべきことではなく、日本文芸の全般に通じ、すでに実践に於ても確たる業績を示されてゐる方達に俟つべきであらう。私は自分の未熟浅学をよく知り、この問題について諸先輩に伍して論じることの僭越でないかを深く懼れてゐる。たゞこの蕪文を機として大方の御教示を得て、自分の蒙を啓くを得れば幸ひだと思ふのである。

此処で対象にする諸論文としては、「日本文芸学の樹立」（文

学・昭和九年十月）「学の対象として見たる日本文芸」（日本精神文化・昭和十年一月）「個人様式の対立と系列」（国語教室・昭和十年十一月）などである。尚最近管見に入った国文学理論における一二の問題について、一応整理をすることが、当面の問題に入る上にも便利だと思ふ。

註　日本文芸学の名は早くから石山徹郎・高木市之助・垣内松三・風巻景次郎の諸氏によつていはれてゐた。

一、方法論と世界観の関係

先づ、日本文芸学の方法論を論じることは無意味であらうか、この問題について答へねばならぬ。風巻景次郎氏は古典作品研究論（昭和十年十月・文学）に於て、文学の研究は研究者の世界観によつて決定され、解釈の過程すら普遍性をもたない、といはれる。それゆゑに今日のやうな、「別箇の世界観的立場の並存する過渡的時代に於いて、普遍性を有する方法論を建てることは、内容に於いて空虚な形式論となる事を結果するであらうし、具体性を有する方法論を建てることは他の世界観的立場のそれを拒否する事となるであらう。」

さうすれば、日本文芸学というやうな普遍性を有する一般論を立てること、それの方法論を論じることは、無意味又は一方的なものに終らざるを得ないであらうか。

私はこのやうな考へ方を否定するものである。私はこの論に三点の疑問をもち、以下それを述べようと思ふ。如何にも私達が、特定の世界観の下に立つことなしには、何等の理論的業績をもなし得ないことは事実である。ことに文芸作品の如きは、歴史の流れの間にあつてそれに溶解されることに反抗する、超歴史的所与ともいへるであらう。かやうに一面に於て歴史的（時間的）社会的（空間的）存在としての客観的制約をもち、一面に意味または価値としての無時間性の要求をもつものにとつて、この二律背反に対する何等かの解決なくしては、具体的な研究に従ひ得ぬことは必然である。さうして、それを決定するものは各自の文芸理論であり、更にぎりぎり迄もつて行けば、各自の世界観といふべきであらう。

しかしながら、（一）それだからといつて、風巻氏のごとくこの解決を懼れて無限の後退を試みることは、すなはち有限なる現実の経験にのみ認識を制限しようとするものではないか。この意味で、それは認識論上の実証主義、懐疑主義、或は相対主義の立場に立つものである。その結果は一切の理論的実践、文芸本質の探求を否定せざるを得ない。

（二）一般に私達が抱いてゐる文学理論・直接生きてゐる世界観を、意識的にせよ、無意識的にせよ他の文学理論、世界観より優越だと私達は信じてゐる。優越とはこの場合妥当的といふ意味であつてこのやうな普遍妥当的要求を前提としなければいへぬことである。もしこのやうな絶対普遍の欲求を理念とよぶならば、私達の畢竟相対的でしかあり得ぬ世界観と雖も、その位置にあつてはそれ以外のものであり得ぬ必然性をもつ限り、同時に絶対的なものとして理念の実現でなければならない。かゝる理念の内在なくして科学は成立し得ない。（この考へ方は

本文批評の場合にも理論的には適用し得る。）「今日のやうな時代」であるから方法論が論ぜられぬといふことは、「今日のやうな時代」には科学として国文学はあり得ないといふ結論に達しなければならぬ。これは氏が庶幾する科学的研究と矛盾せざるを得ないであらう。

恐らく風巻氏の真意はそこにはない。氏が世界観の反省と自覚を強調されたのは、一応世界観的立場を度外視する意味であつたらう。「事物と世界とに関する既存の観念の外に出て、客観そのもの、世界そのものを正視することであり、レッテルをはいだ客観と世界そのものに面をあはすこと」（ディルタイ）を望まれたからであらう。まことに経験科学としての国文学は、このやうな対象（古典）の意味に忠実であることを先づ要求するのである。故藤岡作太郎博士の云ふ如く（国文学史・平安朝篇）平安朝文学を評するには、評者みづから平安朝の一人となることが、世界観的立場を忘れることが、第一次の反省として緊要である。「私は時間と空間とから離して美を理解し得ない。そこで私は精神の産物について、私がそれと生活のつながりを発見する時初めて喜びを感じ初める。且つそれが私をひきつける結合点である。イサリック（Hissarlik）の粗野な土器は私をしてイリアッドをよりよく愛せしめた。そして私は十三世紀に於けるフイレンツエの生活を知つてゐる為に神曲をよりよく味ふ。……ゲエテは『唯一の永続力ある作品は折にふれての作品である』といふ深い言葉を語つた。然るに結局は一般にたゞ折にふれての作品があるのみである。何故なら、あらゆる作品はそれが作られた場所と瞬間に依存してゐるから、ひとはそれを、もしその起原の所、時そして事情を知らないならば、理解ある愛を以て理解することも出来ない。自己充足的な作品を作つたと信じるのは傲慢な馬鹿ものに属してゐる。最高の作品はただ生活に対するそれの関係によつてのみ価値を有する。この関係をよく捉へれば捉へるだけ、私は作品に於て愈々興味を感じる。」（アナトオル・フランス）

まことに、此の様な生活交渉との関係に於て作品を理解することが、理解に於ける第一次の作業であらう。絶対に成心を去つて科学を実証的なものに基づかしめること、それがかつての「日本文芸学の提唱」以来の風巻氏の主張であるならば、私も賛同を惜しみはしない。その意味に於ては私達はすべて実証主義者であるべきである。

たゞ古典の研究に於ては、それにもかゝはらず、解釈者、研究者が如何に過去に忠実であらうとしても、結局現在の立場を離れることが出来ない。歴史哲学は歴史が過去に於て成立するものでなく却つて現在に於て成立し、動く現在（現在性）から解釈されねばならぬことを説いてゐる。私達の研究対象たる文芸作品を存在と意味とに分けて考へるならば、存在としての作品は意味としての内容を制約するけれども、猶意味の把握は事実に於ては読者の主観によつて動かざるを得ないのである。従つてその対象に対する把捉の仕方・解釈の具体的な方法に対する反省は、同時に文学研究の基礎をなすものである。各研究者の研究が各自の世界観によつて限定されてゐることを自覚せよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com